

第2回士別市立病院のあり方検討市民委員会 議事録

1. 開催日時 令和7年5月22日（木）
2. 開催場所 士別市立病院 2階会議室
3. 出席者 委員：8名（欠席2名）

事務局他：副院長、他6名

4. 傍聴者 3名（報道1社）※そのほか関係者6名
5. 会議内容 開会

（1）事務連絡

（2）議題

①基調講演「公立邑智病院の再整備の取り組み」

総務省経営強化アドバイザー 日高 武英 氏

公立邑智病院看護部長 日高 美晴 氏

②意見交換

（3）その他

閉会

※配布資料

市民アンケート（成案）

基調講演資料

6. 会議要旨

【事務連絡】

- ・市民アンケートについて、無作為に抽出した18歳以上の市民1,500名宛に、5月の連休明けから順次郵送。5月22日現在、450件の回答があり、回答期限は5月31日まで。次回の委員会において、アンケート結果を報告したい。
- ・第1回目の議事録については、事前送付のとおり公開することとする。
- ・「病院かわら版」を発行し、病院整備について市民と情報共有を図る。

【議題① 基調講演】

〈日高武英アドバイザー〉

公立邑智病院は三町からなる病院で、立地している邑南町では人口が1万人を切っている。病床数は急性期と地域包括ケアの98床で、常勤医は12名、総合診療を中心に行っている病院。

もともとは年間4億円の赤字を出していた病院で、今も年間1億円から2億円弱の赤字であるが、公立病院ということもあり公的支援をいただきながら経常的には黒字になっている。赤字を一切出さなくすることもできるが、そうすることでやめていく医療が多くある。例えば小児科、産婦人科、救急をやめると黒字になるかもしれない。しかし公立病院なので、地域に必要な医療を行う必要がある。

一番重要なことは、病院の責任と自治体の責任をしっかりと切り分けること。自治体としてこれ以上無理な医療は続けることができない。不採算であってもこれだけは絶対

にやってほしい医療は、お金を法的に入れてもらわないと成り立たないが、それによって地域の暮らしが守られれば、自治体として公立病院を経営する意味がある。

病院の責任としては生産性であると思う。職員一人当たりの生産性、時間当たりの付加価値をどれだけ上げるかというのが重要。公立邑智病院では現在職員一人当たり3,500円くらいの生産性で業務を行っているが、10年前は2,500円を切っていた。ここは努力の部分だと思う。また、経営改善には事務部門が非常に重要だと考えている。

医師について、この20年くらいは常勤数はあまり変わっていない。医師クランクという医師を補助する職員を多く採用し、NP（医師の指導のもとで、より高度な診療行為を行うことができる看護師）や研修医などを増やすことで、限られた人数で医療を行うことができるようになった。全員参加で医師も早く帰ることができる。さらに、デジタル技術を使用してこれからの医療を行わないといけないと思う。

全国の自治体病院について、半分以上が赤字病院で、その半分以上が公的補助（繰入金）があっても赤字だ。令和2年から4年の3年間はコロナ補助金でその比率は落ち、黒字病院が増えていた。しかし令和5年度は、コロナ前よりも全国的に経営が悪かったというデータがでている。この要因は、コロナが明けても患者さんがコロナ前のように病院を利用することが少なくなったこと。やはりコロナのダメージは非常に大きく、どうしても病院から足が遠のくという状況と、もう一つは光熱費や人件費など費用がかさんでいること。

人件費を上げなければいけないという世の中の風潮は当然大事だと思うが、病院は人件費だけを上げるわけにはいかない。収入が上がらなければいけないという中で、診療報酬体系があまり変わらずに人件費が上がるということになっている。さらに、自治体病院は規模別に経営の不利な状況が出ており、例えば公立邑智病院であれば100床未満

の病院となるので、入院の診療単価は2万4,000円くらいが平均であり、外来の診療単価は8,500円。これが500床以上の病院になると、入院の単価は6万6,000円くらいで、外来の単価は1万円を超える。

規模が小さくなればなるほど単価が悪くなるというのは、どうしてもそれを回数で稼がなければいけないとなるが、病床数も少ない100床前後の病院は、この不利な条件の中でいかに収支を上げていくかを考えなければいけない。規模が小さくなる時に、職員一人一人がどのように生産性を上げるかというのは重要である。令和6年度決算はまだ確定していないが、公立邑智病院も14年ぶりに赤字に転落する。診療報酬が上がらず、人件費と光熱費など費用がかさんでいるので、この状態はやはり国の構造や医療界全体が変わらないと難しいと思っている。

士別市立病院に来て今回で4回目となるが、やはり士別市には唯一の重要な公立病院として必要だと思っている。入院ができるということは、やはり市民からすると絶対守っていかねばいけない病院だと思う。今後どのように経営を改善していくか、一緒に考えていきたいと思っている。

国土交通省の資料によると、国土をつくるうえで病院も重要なインフラとして位置づけられている。公立邑智病院を40年ぶりに建て替えたが、40年経っている病院をもう10年、20年と続けていくのは無理だということを地域や議会、検討会と5年くらい前に検討して判断した。10年後に病院を止めるのであればこのまま延命しても大丈夫であったが、この地域にあっては少なくとも40年は人の暮らしがある。そうであれば建替える方がよいという方向で話をしてきた。

建て替えるのであれば、今の時代、医療DXに踏み込まないとならない。公立邑智病院では10年前に電子カルテを導入したが、電子カルテを基盤として医療DXを進めな

ければいけない。電子カルテの中にはリハビリのシステムや看護システム、給食システムなど、いろいろなシステムと連携している。例えばA I 問診では、事前に自宅で写真を撮り画像を送ることで、A I が問診し、電子カルテに共有することで、来院する時には医師は事前に考えて望めるものとなる。小児、発熱外来などでは非常に活躍している。また手書きの紹介状においては、A I により読み取り電子カルテに取り込むことができるなど、今はこのような時代になっている。

物流においては、薬剤のセットや配送など、今はロボットが院内を動いている。病棟に必要なものも、ロボットがコンビニまで行って病棟まで運んでくれる。60 キログラムまで積載可能で、手術器具なども現場に運んでくれるため、重たい搬送がいらなくなった。また通院支援アプリを導入し、待ち時間の案内などをスマホに送ることができる。クレジットカードを登録することで会計の支払いができ、診療が終わると会計を待たずすぐに処方箋をもらって薬局に行くことができる。また、ベッドサイド端末として病棟の床頭台にはディスプレイがあり、電子カルテ端末との連携によるリハビリの情報や患者さんの体温の記録などを確認、記録することができる。

医療の安全をデジタルで購入するというのは、やはりこれからの時代に必要である。公立邑智病院のような鉄道も走っていない、駅もないという場所にあっては、経営改善をするためには生産性を上げること、全職員が協力することが非常に大事。そして、病院を建替えないとこれからの少子化の時代、人口減少の時代にはついていけないと思う。人口が必ず減少する状況では、DX、ロボットが仕事をしてくれないといけない。これから病院を建替える、改修するなど話を進める中で、その辺をいっぺんにやってしまうのがよいと私は考える。

〈日高美晴看護部長〉

- ・新しい病院について、写真を交え紹介。

【議題② 意見交換】

委員

三町（邑南町、川本町、美郷町）の予算の比率は。美郷町の方は、大田市立病院に行ってしまうのか。

日高アドバイザー

公立邑智病院は、医療圏でいうと大田市と一緒にあり、大田市と邑智郡の医療圏となる。大田市立病院は病床 300 床くらいで、美郷町の中心からは 20 分程度で行けるので、おそらく 8 割方は大田市立病院に行っているのではないかと思います。ただ、地域的には当然近いところもある。

三町の病院ということで、負担割合は立地している邑南町が 86%、あとの 2 町で残りの 14%である。美郷町は 4 パーセントほど。運営費については受診率によるもので、邑南町が 75%くらいで、川本町が 15%くらい、美郷町が 10%以内というところ。

委員

エリアで見た時に、浜田市には国立病院機構があり、江津市にも江津総合病院がある。人口構成では浜田市が 5 万人、江津市は 2 万人、大田市が 11 万 5 千人という中、士別市でいうと名寄市に名寄総合病院があって、高速道路で 1 時間の距離に旭川市の医療機関があると。公立邑智病院と状況が似ているなど。

日高アドバイザー

私が着任した時は、病床稼働率が45%くらいで、産婦人科が休止になり、助産師は全員退職している。救急を止めて慢性期にしようかという時期に着任した。地域の病院として存在価値を求める中で、まずは救急が必要。救急のレベルで30分違うというのは結構大変なことで、例えば100回に1回助からない人が出るというだけでも私は重要だと思っている。

それから小児科を絶対守りたいと思っている。小児科は総合診療でやっているの、科を守りたいというよりは小児を受けやすい病院をつくらなければいけなく、そうしないと若い人が帰ってこない。家族としても小児科がある病院がよいとなる。地域を存続させるためには、高齢者も大事だが若い人が帰ってきやすいようにするために小児科を守るということは絶対に譲れない。産婦人科をやるかやらないかの議論となった際には、反対もあつたがやってよかったと思う。

急性期医療も小児、産婦人科もすべて不採算だが、地域で人が暮らしていくためには必要。不採算な医療だけでは成り立たないので、公立邑智病院の売りである総合診療と内視鏡で採算を取っている。

委員

今後は、どこまで士別市立病院に関っていただけるものなのか。また、公立邑智病院の建て替えの事業費はどの程度か。

日高アドバイザー

誘っていただけるものならば関りを続けていきたいと考えている。職員の気持ちとして、一緒になってこの病院をわが家のように守りたいというスタンスで助け合えるようになれば、生産性は上がると思っている。

事業費は60億円で、貴重な投資だと思っている。病院は経営なので、投資をし、収入を上げなければいけない。